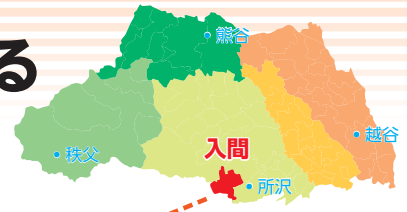


イチ押し

地域経済の活性化を語る

県内首長に聞く リレーインタビュー⑭

入間市 田中 龍夫 市長 (60歳)



「充実した生活都市 入間市」をキャッチフレーズに
地域経済の活性化を進める田中龍夫市長

現在、当市の人口は約15万人ですが、過去を振り返りますと、1970年代の後半から毎年増え続けていました。人口急増のために当時は、3つの小学校を同時に新設するなどの対策を実施したほどです。今、その時の子どもたちが成長して結婚し、独立して市外に家庭を持つ一方で、市内に残るのは子どもたちを育てた親御さんたちです。高齢化が進み社会保障費が増加する半面、税収は伸びず財源の厳しい状況が続いています。

だからと言って、昔みたいに同じような考えで、ただ単に人口増に頼ってゆく行政運営をしては、また同じ結果となるでしょう。子どもが成長した段階で、この入間市という故郷から離れて、私の知らないまちで就職し、結婚して子どもを産んでいるかもしれません。ではどうするか。私は、常に若い人が住んでいる循環型の都市構造にしなければならないと考えています。

当市では、人口急増時の1976年に策定された第2次総合振興計画で、「香り豊かな緑の

文化都市」を将来都市像として、現在まで各種の施策を展開してきました。そして、昨年11月に私が市長に就任してから、この将来都市像の実現に向けた今後4年間のステップとして、「充実した生活都市 入間市」というスローガンを掲げ、市政運営の目指すべき方向性として次の5項目を掲げました。第一に「働く場があること」、第二に「心と体の健康を増進できること」、第三に「自然・文化を満喫できること」、そして第四に「生きがいを持って、学芸や趣味を楽しむことができること」、最後に「市民に信頼される市役所であること」であります。

先ほどの循環型の都市構造にするには、一番目の「働く場があること」に当てはまることで、収入が確保できなければ充実した生活を送ることができません。幸いにも市内には、世界に誇れる優良企業が複数存在しています。F1レースに出場する自動車のエンジン部品を製造している企業や、2010年に起きたチリのコピャポ鉱山の落盤事故で、作業員の救出に使われたカプセルを引き上げるチェーンを製造した企業も市内の会社なのです。さらには、種子島ヘロケットを運搬する運送会社や、最先端技術を持つ金型精密企業など、市民が自慢できる企業が市内に多くあります。こうした誇れる企業の存在をもっとアピールしたい。また、多くの企業を呼び込むことにつながれば、市民の働く職場が増えると思います。

工業だけでなく商業の分野でも働く場を確保しなければなりません。市内中心部の商店街は少し元気を失っていましたが、店主の方々がいろいろと努力して、活性化に向けた取り組みを行っています。しかしながら、個人商店だけの努力だけではだめで、人が集

まるような仕掛けを組織的に作らなければ活性化は難しい。例えば、圏央道入間インターチェンジ近くにアウトレットパークがありますが、その周辺には毎日1万人近くの買い物客が来ます。その買い物客の1割でも良いですから、市内中心部の商店街に誘導するような仕掛けを考えていく必要があると思います。

また、最近では地元百貨店とのコラボで、スタンプラリーなどのイベントを開催して集客活動に取り組み、非常に良い結果が出てきました。何事も結果が出ないと取り組みが消極的になってしまいがちですが、とにかく工夫を重ねてできることは、何でも挑戦して成果を積み重ねて行く、ということが大事なことだと考えております。

農業では、ご承知の通り狭山茶の主産地として全国的に知られ、当市だけで全生産量の約半分を占めています。昔から「色は静岡、香りは宇治よ、味は狭山でとどめさす」と言われているほど、狭山茶はその味が売りです。毎年、新茶の季節にイベントが行われ、今年も5月に開催したところですが、大勢の人々が来場しました。十分に観光客を呼び込めることができる事例であり、その他にも観光資源は豊富にあります。そこで、市長選の公約にも掲げましたが、これからは「観光化」を進め、地域経済の活性化につなげたいとも考えています。

先ほども申し上げましたが、世界に誇る多数の企業は産業観光として活用でき、狭山茶も茶摘みの体験型観光として成り立ちます。

入間市の概要

人口(平成22年国勢調査)	149,872人
世帯数(同上)	56,843世帯
平均年齢(同上)	43.6歳
生産年齢人口比率(同上)	66.4%
面積(同上)	44.74平方キロメートル
名目市内総生産(平成22年度市民経済計算)	3,791億1,800万円
事業所数(平成22年工業統計)	316事業所
製造品出荷額等(同上)	3,352億5,245万円
事業所数(平成24年経済センサス速報)	4,890事業所
年間商品販売額(平成19年商業統計)	2,077億5,856万円



「八十八夜新茶まつり」は、5月に市役所脇茶園で毎年行われている

また、毎年20万人以上の方が訪れる「入間万燈まつり」や、県内外から30もの太鼓参加団体が集う「いるま太鼓セッション」、「おとろう祭り」、「ジャズフェスティバル」など、人を呼べるイベントが1年を通して繰り広げられているのも大きな魅力です。この他にも、加治丘陵や狭山丘陵、それに入間川や霞川、不老川といった自然がたっぷりあり、森林浴やハイキングなどが楽しめるのも魅力です。将来的には、この3河川に遊歩道などを整備して、神社・仏閣などの歴史文化遺産と組み合わせられた観光ができるようにしたい、という目標も持っています。

このように、たくさんの“入間自慢”がある豊かなまちなので、観光化に向けて市長自らが先頭に立ってシティセールスを進めて行くことにしました。もちろん、約850人いる職員も市外に出た時には、入間市の魅力を話題にし、約15万市民も事あるごとに自慢話をするので、入間市の魅力が広まります。最近では、着地型観光という言葉をよく耳にしますが、当市でもこうした観光資源を活かし、様々な観光ツアー企画を立案して、観光化を進めて行きます。これこそが当市において、最も適した地域経済の活性化策ではないでしょうか。シティセールスを積極的に行っていくことで、着地型観光がより充実すると考えています。次回は、埼玉県議時代に同期だった高橋努越谷市長にバトンを渡します。